

## 今日の説教のポイント <創世記2章18-25節>

①神様が人の助け手をまず動物の中に探し求められたこと、このことの積極的意味を考えなければならない。

ここを読むと、動物の中には人に合う助け手がいなかったわけですから、人と動物の「遠さ」を考えてしまいがちです。しかし、「人が独りであるのは良くない」(18)は、男と女の問題を考える前に、まず「人は他のものと共に生きる存在である」ことを考えなければならないのです(1章27節、人を男と女に造られた、のテーマと同じ!)。ですから、神様がまず動物の中に人の助け手を探そうとされたことに目を向け、人と動物の「遠さ」ではなく「近さ」をこそ考えなければなりません。人に動物の名をつける資格が与えられました。事物は全て、名をつけられて初めてその存在が認められます。一つひとつに名をつけ、世界の中の全ての存在に意味を与える役割が人間に委ねられたのです。「宇宙船地球号」であるこの世界。良き船長たる人間の下で、全てのものが認め合い、支え合い、共に生きることを神様は求めておられるのです。

②しかし、人に合う助け手は、結局、動物の中には得られず、神様は男の一部から取った女を与えられた。このことの意味は?

現代の生物学によって、メスの発生が先でオスの分化がその後起こることが分かって来ました。だとすると、聖書の記述は間違っているのでしょうか? そうではありません。むしろ、聖書はそういったことを問題にしているのではないことがはっきりしたと考えるべきです。では、何を伝えようとしているのでしょうか?

ポイントは、「彼に合う助ける者」(18)「自分に合う助ける者」(20)の「合う」にあると思います。これは元のヘブル語では、「～を前にして」を意味しています。すなわち、「鏡のように、相手に自分自身を見るような」という意味です。動物は人に近い共に生きる存在です。しかし、動物は、人間が自分自身や自分と同じ人間(他者)が罪を犯して、その罪に気づき、悔い、なおその罪を犯した自分自身や他者を赦し、愛することを教えてくれる存在ではありません。そのためには、自分の同類であり、しかも異なる存在である者が必要なのです。神様はそのような者として、女を男に与えられ、「彼に合う助ける者」とされたのです。神様ともあろうお方が、私たちを救うために、救い主として私たち人間の中に同じ姿をとって来て下さったことに思い至りました。感謝!